

會報

第618号

2020年3月1日発行

一般社団法人

監査懇話会

編集発行人 菅野 重雄

<https://kansakonwakai.com>

第766回講演会

2020年1月21日

演 題：2020年の経済動向～東京五輪を迎えて

講 師：(株)第一生命経済研究所 経済調査部 首席エコノミスト 熊野 英生氏

《前途多難な一年》

今年はイベント、事件が相次ぎ、評価が分かれる一年、見通しがつきにくい前途多難な年になると思う。こういった時代は、自分なりの一年のストーリーを作っておいて、イベント毎に1か月分、3か月分と検証してみて、ストーリーを修正していくやり方がある。

昨年从今年にかけてどんな経済動向だったのか、を振り返ると、年半ばに令和が始まるということで、海外情勢はトランプ大統領のせいでは不確定ではあったが、GWの10連休効果で消費が盛り上がり、春先の景気を押し上げ、7～9月期まで続いた。10月の消費税アップ前の駆け込み需要があったが、10～12月期は反動減が出て、百貨店の宝石類、家電製品などは軒並み売り上げを落とした。しかし、軽減税率などの手当てで前回の消費税上げの時よりは反動減の幅は小さく、10月は対前年比で▲10%の売り上げ減だったが、11月には▲2%減まで縮んだ。

これからどうなるのか。東京五輪が7月24日から8月9日まで開かれる。モノを売る側からいえば、例えば家電製品などは大きな期待をかけているだろう。キャッシュレス決済の値引きは6月で期限切れになるが、対象の中小店舗はそこまでオリンピック需要を取り込もうとするだろうし、消費は7～9月期にクライマックスに達するだろう。

《インバウンドの動向》

訪日外国人については、政府は今年4千万人を見込んでいるが、昨年は日韓関係の悪化で韓国人観光客が落ち込み、トータルで3,188万人だった。政府の目標である4千万人はきついだろうが、3,600万人あたりまではいくのではないかと。一人当たりの彼らの消費額は21万円だが、今年は30万円までの伸びが予測される。彼らの宿泊・飲食、観光等でレジャー産業や宿泊・飲食関係は期待が大きく、4～6月期、7～9月期は彼らの消費で景気の落ち込みはないと思われる。五輪の経済効果は我々シンクタンクの予測では、2兆円と

見られる。消費税上げによる国民の負担額は年間2.1兆円と見られ、ちょうどその分を穴埋めする形になる。GDPでは年間0.8%の押し上げ効果がある。

五輪後は経済は大きく落ち込むのではないかと、いう心配はある。しかし、東京都オリンピック・パラリンピック準備局によれば、五輪後の経済効果について「レガシー効果」として12兆円も見込む。直接効果の実に6倍。主催者としての数字であるが、民間は厳しく見ており、例えば私はホテル業界に呼ばれて五輪後の経済見通しを話しに行く機会があったが、彼らはかなりシビアに「その後」を見据えている。民泊解禁も、ホテル業界等が五輪後の反動減を心配して、部屋数の大きな増加に頼らず、五輪の一時的な観光客増は民泊にも負担してもらおうという発想から出ている。今年の10月以降は旅館・飲食・観光各業界はそれまでの余剰生産力を調整していくことになり、国内消費の大きな下押し効果になる。年前半は五輪効果で1%成長が2%成長まで伸びる勢いだが、それが続くと錯誤して、大きな設備投資に走る経営者らは、後半かなりのリスクに見舞われるだろう。私は基本的には今年は景気拡大の年とみているが、五輪終了後に今後10年先まで見通したものが必要になろう。人口減少問題にどう対処するのか、ことに地方の疲弊をどうするのか、ポジティブな面でいうとAI、テクノロジーを今後10年間でどう生かしていくのか。まさに皆様監査役のような視点が五輪後には大切になろう。

経済成長率は昨年は0.7%と見込んでいるが、今年は日本の潜在成長率である0.5%程度に止まるのではないかと。五輪までは順調に経済は伸びるが、終わった後には消費税上げの反動や潜在的なリスクが顕在化する年といえそうだ。

《海外情勢は》

今年の海外情勢のクライマックスは11月3日の米大統領選。今月15日、トランプ大統領と習近平主席は米中貿易戦争について、第一段階の合意に達した。これはアメリカが国内の大統領選に専念するため、一

時小休止した、ということ。年初のイランのスレイマニ司令官殺害には驚かされた。アメリカでも最高指導者に施策を上げるときは、3種類用意して、中間のほどほどの案を選ばせるようにするが、B・ウッドワードの『FEAR 恐怖の男』によれば、当時の国防長官のマティスらはトランプ大統領へ極端な案が上がらないようにしていた。トランプ大統領が独自に極端な施策を出すと、彼らは一応聞き置き、そのまま放置。すると4～5日でトランプ大統領は忘れてしまう、といった繰り返しであったという。ところが、腹心ばかりで固めた現政権下では、極端な施策も織り込まれ、それをトランプ大統領が選び、実行に移されるという。イスラエルの米大使館をテルアビブからエルサレムへ移したのもそうだろうし、今回のスレイマニ司令官の殺害も昨年末のイラクの米兵殺害の報復として挙げられた案の一つだった、という。ポンペオ国務長官は大統領選では副大統領候補に登用されることを狙っているともいわれる。ただし、イラン問題では、トランプ大統領が早々と矛を収めた。大統領選に専念するためだ。北朝鮮問題、中東問題、ウクライナ問題、米中貿易戦争などの火種は、次の大統領が決まってからの話になり、来年以降に持ち越された、といえる。

《対立する米中関係をどう理解するか》

米中貿易戦争は今月第一段階の合意に達したが、これで争いが終わるとみる人はいない。中国が経済的に、軍事的に世界の覇権を握るべく動き、アメリカは1980～90年代に経済的に追い越そうとする日本を抑えつけたように、今回も中国の頭を抑えようとしている。チャイナ・イノベーションとされる「情報通信技術」は中国の経済成長率が2017年6.8%だったのに対し、同技術の伸びは21.8%の伸びで、18年は6.6%に対し30.7%。2年間で実に1.6倍にも膨れ上がっている。アメリカは「ファーウェイ」に圧力を加えているが、同社の情報技術が安保政策に影響する、というだけでなく、情報通信技術の覇権争いが根底にあるため、米中摩擦は容易には収まらない。

20～30年前の1990年代、中国は安い労働力で「世界の生産工場」になったが、いまやイノベーションに力点を移している。今年は5G元年といわれるが、ファーウェイは世界シェアの3割を握っている。基地局作りなど、とてつもなく安価なのだ。

対するアメリカ企業は考えることが桁違いだ。テスラの創業者イーロン・マスクは今は第5世代を上回る第6世代まで発想を広げ、「スペースX」という会社で、宇宙に自前のロケットを飛ばし、衛星を1400個ほど輪のようにつなげる方法を提唱している。第5世代までは基地局を通して電波のやり取りをしていたが、次世代では携帯から宇宙に電波を飛ばし、受けるのも宇宙から。それで全世界がつながる、というのだ。

こうしたアメリカの技術をコピーしてきたのが、こ



れまでの日中のやり方だった。日本がアメリカを追い越すのには、若い技術者を大挙してアメリカへ送り込み5～6年働かせて、日本へ呼び戻し、技術を磨くしかない。中国は「海亀」と称する若者たちが実際にそうやって、中国へ戻って次々と新しい技術を生み出しつつある。さらに中国は米企業買収で技術を取り込んでいる。それぞれ合法的だが、アメリカはグレーな部分、軍事技術に転用が可能なものなどにタガをはめて、技術流出を防ぐ手立てを講じている。こうした米中の技術角逐に日本が勝つ要素はなかなか見つからない。アメリカの企業の上前をどうやって撥ねるか、その施策がないと2030年代に再び日本が甦る、ということにはならないだろう。

《安定化する株価・為替》

今、日経平均は2万3千～4千円台、ダウは3万ドルをうかがう。日米の株式市場は楽観的なシナリオで動いている。FRB（米連邦準備制度理事会）が昨年3回にわたって、金融緩和を行ったことにもよるが、米中貿易戦争が今よりひどくならなければ、米経済は好調で順調な成長を遂げ、秋には民主党・サンダースやウォーレンのアンチビジネス派ではないトランプ大統領の再選が有力になる、と踏んでいる。トランプ大統領に問題なしとはしないが、市場としては彼のほうがこの好調相場を維持してくれる、と考えている。

《2020年から10年間のイノベーション等の焦点は》

総務省は5Gによる経済効果を46.8兆円と見積もる。中心は「交通・移動・物流」分野の21兆円。いわゆる「自動運転」にかかわるものだ。日本の現状は自動運転は前後方向はすでに出来上がっており、左右方向もレベル4、高速道路など限定的なところでは2025～30年の間には実用化できそうという。5

Gのインフラを使いながら、高速道路でトラック等の物流分野が先行するのだろう。第2位の需要予測は工場・オフィスなどの「IOT」で13.4兆円が見込まれる。工場などの部品管理がすべてAIで行われ、不足部品の注文・搬入などが自動化される。3番目の需要は「医療・健康・介護」で5.5兆円。これは画像診断などですでに実用化されている。私の経験でも大腸の内視鏡検査をやって、画像を見ながら腫瘍の切除などが行なわれる。5Gはびっくりするような変化をもたらすわけではないが、生活は便利になる。

ただし、日本の5G実現のレベルは、現状は携帯の基地局設置などに取り掛かるところで、それさえもまだ3年くらいはかかるといわれる。総務省の試算のようなものは今後5年、10年先のこと。それだけ息の長い需要があるということでもあるが。

ただしこれらはあたかも日本の企業が牽引していくかのように語られているが、製品生産で先行している欧米系企業や中国企業がこの46兆円をぐっと掴んでいくのだろう。IOT分野でも日本企業はまだ小さく、ドイツのシーメンス、スイスのABBのほうが巨人だ。今後、こうした技術覇権をめぐる争いは厳しくなる一方だ。

もう一つ言えば、中国が心配だ。テクノロジー分野は20～30%成長はしているが、産業界はアキレス腱ともいえる過剰債務問題を抱えている。中国の非金融部門の過剰債務はGDPの1.66倍に膨張（2016年）、日本のバブル崩壊時の同1.49倍を上回っている。「グレー・リノ（灰色のサイ）」と呼ばれ、サイは日ごろはおとなしいが、一度暴れだすと手が付けられなくなることになぞらえて、中国の過剰債務問題は一度火を噴くと収拾がつかないといわれており、5年、10年でこの問題が顕在化する恐れがある。

《日本の製造業、企業収益、所得、雇用》

世界は2年毎に景気の下上を繰り返し、2018～19年はダウントレンドにあったが、19～20年は上昇局面に向かう流れに、5G需要もあり日本の製造業はそこそこ良くなるのではないかな。製造業が上向くと企業収益が上がり設備投資等に向かう。株価にとって良い流れで、日経平均は2万5千円程度まで行きそう、と私の同僚でマーケット担当のエコノミストは言う。企業収益でいうと、ここ数年すごく堅調だった。対前年比でみると、さすがに昨年4～6月期はマイナス。今年の春闘は昨年のこの悪化を引き継いで、かなり低調になると考えられるが、利益の水準はかなり高い。損益分岐点が低いから、少し売り上げが回復すれば、損益分岐点を上回る部分が企業収益となって積み上がっていく。

それは我々の暮らし向きにどうつながるのか。製造業が良くなると企業収益が上がり、設備投資に金に向かい、雇用・所得につながる。我が国の雇用の数字の

良さはミラクルともいえる。1995年以降の「雇用者数の増加」を見てもらえば分かるが、まず生産年齢人口（15歳から64歳までの男性）に着目してほしい。我が国は1995年にピークアウトし25年間ずっと減り続けている。しかし、この現象に関係なく、雇用者数はどんどん増え続けている。ことにアベノミクスが始まった13年から7年間の増加が著しい。年金支給の開始年齢が上げられたことで、シニア、そして女性の雇用が大きく増えている。彼らの所得による家計費の増大で消費は案外底堅く推移している。問題は雇用の量は増えたのだけれど、一方で賃金が増えない。もちろん2014年以降、ベアがあって0.3～0.8%伸び、今春闘も上がるだろうが、プラス幅が実に小さい。さきほど今年の消費は五輪を当て込んだ家電製品、宿泊・レジャーで伸びると言ったが、おそらく賃金の上昇はついてこない。賃金の上昇のないままの消費拡大はいずれ反動が来る。五輪前の消費拡大は危うさを抱えている。

消費性向の変化の表も見してほしい。経済は消費が増えると、小売り・サービス分野が儲かり、企業収益が上がり、所得の上昇につながる。こうした消費拡大と所得上昇はポジティブ・フィードバックでさらに好循環を繰り返し、これが経済成長のもとになる。裏返しに言うと所得の上昇を上回る消費は減らされていくだろうし、消費の反動減が出てくる。だから、消費性向はあまり変動しないほうが良い。今どうなのか。4年前に消費税を上げて以来、消費性向は下がっている。消費の比率が下がるのは、所得から消費を引いて、貯蓄が増えることになる。この5、6年どんどん貯蓄が増えている。皆さん、5、6年前に「貯蓄率ゼロ社会」と言われたのを覚えているだろうか。2000年から14年ころまで結構多くの学者が「貯蓄率はゼロか、マイナスになる」と予測していた。なぜか。高齢化が進むから貯蓄を取り崩す動きが進む、と言っていた。ところが事態はそうは動かなかった。消費税を上げた2014年ころから貯蓄率が上がっていく。これは若い人たちの将来不安が直接出ているからだ。20～30代の貯蓄性向がこの8年間でどれだけ上がったか調べると、8%も上がっている。若い人たちは金を使わず消費性向は下がり、貯蓄性向が上がっている。2013年からの年金改革で厚生年金の報酬比例部分の受給が3年毎に1歳ずつ繰り上げられ、25年に65歳になる。これでは若いうちから、将来のために金をためておかないといけない、となる。社会保障への不安感が消費の勢いを殺している部分が結構ある。安倍首相も先日の施政方針演説で「全世代型の社会保障」と唱えていたが、五輪後の消費動向はこの年金改革への信頼感が回復するか否かにかかっている。

昨年消費税上げに際し、政府に呼ばれて意見を言う機会が多かったが、同席の多くのエコノミストはほとんどが駆け込み需要とその反動減の分析ばかり。私の

ように消費行動について、国民のメンタルな部分に着目する人はいなかった。統計は大事だが、目に見えたものだけを信じてはいけない。目に見えない、社会保障に対する信頼とか、消費性向とか、が重要だ。この消費税を上げたお金がきっちり使われるのなら財政に対する不安は解消する。くだらないものにばらまいたら、社会不安は潜在的に高まる。国民は絶対に賢い。五輪後はそうした社会心理が消費の動向を左右するのではない。

社会心理で言えば、我々は皆、5～6年前から「2020年までの日本は五輪があるから大丈夫」と思い続け、五輪後は海図なき航海に出るような気分になるだろうな、と考えてきた。政府の役割は五輪後、一度仕切り直しをして、その後の10年を見据えたような目標を出していかないと、すごく大きな社会不安が広がる恐れがある。

《人口減少と近未来の日本の課題》

私は昨今の人口減少問題には、かなり肝を冷やしている。私は昨年この場で「2019年は改元元年で結婚が増え、20年の五輪後には出産も増えるのでは」と調子のよい話をしたが、半分当たって、半分外れた。一昨年の婚姻数は対前年比で▲3.6%で大きく減ったのに対し、昨年は▲0.4%。プラスにはならなかったものの減少幅は大きく減った。問題は改元を機にしても、婚姻数が減るトレンドは変わらないということ。計算すると婚姻数も出生数も年間1万3千ずつ減っている。予測を大幅に上回るほどに人口減少が止まらなくなっている。政治の世界でこうした傾向に歯止めをかける手立てが取れないものか。昨年こうした話を与党の場で話すことがあったが、政治家は結婚・出産にはほとんど興味・関心を示さない。票にならないからだ。

少子化は止まるところを知らないだろう。2030年で人口は今より5%減る。消費市場はどうなるのか。人口が微増していた2000年から2010年、それが止まった2010年から2019年まで、それぞれの10年間で一人当たり消費はそれぞれ5.8%前後増えた。人口が減る20～30年の消費は0.8%前後は増える見通しだ。消費のマーケットはトントンで、今後はゼロ成長、ということだ。

こうなると必要なことは、賃金を上げて生産性を上げる以外にない。日本は今世界一の高齢大国。現在65歳以上の比率28%が、10年後には3%上がって31%になる。そうすると働き手のかなり多くが60歳以上になる。60歳以上の人たちの給料が、今までのように年収200～300万円だったら、消費市場は大きくなる。10年後に労働市場の大半を占めるようになる60歳以上の賃金を上げ生産性を高めないと、消費市場は縮んだままになる。

社会保障も大切だ。厚生年金収支の推移の表を見る

と、この5年間収支はプラスだ。一定の比率で取られる保険料が、賃金の上昇に伴い増えているからだ。賃金が上昇すると社会不安も後退していくはずだ。ところが問題は高齢者の待遇の悪さ。高齢者は能力に見合った仕事を与えられず、収入が低い人が圧倒的に多い。60歳以上でバリバリ働く人は周囲から「彼は給与が下がったのに、よく働いている」と称賛されたりするが、これは話が逆さまだ。悪平等をやめて、能力の高い高齢者には給与を上げないといけない。

私は昨年『なぜ日本の会社は生産性が低いのか?』という本を書いた。どうやったら、日本の会社の生産性を上げることができるのか、その知恵を書いた本だ。これから10年で総人口は5%、生産年齢人口は7%減る。いくらシニア、女性が労働市場に参加しても、総賃金が増えるのは無理。ならば生産性を上昇させるしかない。いま、世の中で働き方改革と言われるが、あれは未完だ。労働時間を削減する、有給休暇を消化する、あるいは同一労働、同一賃金、という。これで生産性が上がるか?上がらない。労働時間を減らすと一生懸命働いて生産性が上がる、とされるが、あれはこれまで怠けていた人が一生懸命働くだけのこと。一生懸命働いてきた人が、労働時間を減らして生産性を上げるためには、職場毎の工夫がいる。私は今の働き方改革をミッシングリンクと呼ぶ。つながっているようでつながっていない。労働時間を減らしてどうやって生産性向上につなげるか。私の「解」は「勉強」。労働時間が短くなって余裕ができた時間をパチンコや麻雀してはダメ。やはり勉強しないといけない。本を読んで明日の自分の仕事に生きようことを考える。そうした自分への投資が長い目で見ると生産性の向上につながる。マハトマ・ガンジーは言った。「明日死ぬつもりで生きろ」と。不老不死のつもりで勉強しろ、とも。明日の自分が今日以上になるための自己投資が生産性向上につながる。

今日の話をもとめると、①今年は消費税上げのダメージがまだ残るが、五輪需要が出てくるとかなり解消される。②しかし所得上昇がついてこない中で消費が一過性で増えると、そのあとの反動で生産余剰が起きて、それがデフレ圧力になるかもしれない。③バラ色の景気拡大に見えるのは五輪期間だけで、それが終わると人口減少の軛（くびき）から逃れられず少し目を覚ますだろう。④五輪後に人々はようやく今後10年の人口減少社会にどう対処するか考えるようになる。⑤人口減少を乗り越えるにはテクノロジーやアイデアがいる。⑥ところが、テクノロジーやアイデアの世界にはアメリカや中国という巨人がいる。日本はまだ違う手を考えながら、次の10年の競争力の源泉になるものを探していくことが課題なのではないか～ということだ。

本日はご清聴有難うございました。

(文責 清水 光雄)

演 題：監査役への期待 ～頻発する企業不祥事を踏まえて～
講 師：一橋大学名誉教授 廣本 敏郎氏



廣本です。私の本来の専門は原価計算・管理会計です。10年前に公認会計士・監査審査会（これ以降、審査会）に移りました。管理会計畑の人間が審査会の委員になることは誰も予想していませんでしたし私自身もそうでした。

審査会は、公認会計士監査の信頼性確保を主要課題として2004年にスタートしました。2006年に公認会計士の新試験制度が始まって数年後、大変な混乱がありました。公認会計士の資格をどうするかといった議論が行われている頃、私に委員就任の話をいただきました。監査の話はよく分からないが、長くお世話になった一橋大学の先輩や先生方が作り上げた公認会計士制度や試験であり、おかしなことになってはとんでもないと思い、引き受けました。

審査会に9年おり、管理会計や原価計算から離れたので、今やそちらの方の地理に詳しくなりました。今日は、本来の私の専門ではなく、審査会の9年を踏まえて話をしたいと思います。

本日は、監査懇話会という伝統ある会でお話しさせていただくことを光栄に思います。当会は1954年11月に出来ています。企業経営協会会長であった金子佐一郎氏が発起人となられています。私の専門の原価計算の研究会である日本原価計算研究学会が出来たのが1975年であり、この発起人代表が金子佐一郎先生、事務局が企業経営協会でした。監査懇話会とは親戚のような感じがしています。

監査懇話会の目的が「組織の中で孤高を求められる監査役等が知識とエネルギーを補給し、交流を図る母港、を目指して活動しています」とあり、素晴らしいことだと思います。今日は、そういう監査役の皆さんに、少しでもお役に立ち参考になる話をさせていただきたいと思います。

1976年、私が一橋大学の大学院に入ることが決まっていた頃のことです。企業経営協会は素晴らしい社会貢献をしておられましたが、不祥事が起きました。日本原価計算研究学会の理事の方々が大変ご苦勞をされたのを目の当たりにしました。どんなに素晴らしい立

派な組織や制度であっても、それを動かす人間に一人二人の悪い人が入ってしまうと、その組織・制度の使命・責任が果たされなくなってしまう。組織・制度が、しっかりしていることの方が重要ではないか、という思いも若い時にはありましたが、人が重要であるということを痛感しました。そういう意味で、今、企業に限らずあらゆる組織でいろんなことが起きていますが、その防波堤になっていただくのが皆さんであります。

本日は三部構成にしております。まず、市場経済と会計・監査の基本的なところを話します。次に監査業界の大変貌です。公認会計士監査が始まって半世紀以上になります。公認会計士でも「自分はいろいろ経験しており何でも分かってるんだ」と思っているような人は、今の制度や社会が求めているものには全く対応出来ません。全く基本から再構築していただかないといけません。監査役のある方、公認会計士のあり方、監査のあり方、そういうものの考え方自体を根本から見直さなければならぬ時代になって十数年です。十分ご承知のこととは思いますが、今日はその辺りを繰り返し強調します。最後に、それらを踏まえ、主に公認会計士監査の観点から、監査役・監査役制度への期待について話したいと思います。

1. 市場経済と会計・監査

市場経済の制度

限られた資源を無限の欲求が追い求めている中、戦争もしないで、公正に分ち合うには市場経済しかありません。市場経済は、誰もが得をするような、サステナブルな制度です。かつ、個々人の欲得をベースに置いているので、知恵を働かせるイノベティブな制度です。いろんな問題があるとは言え、現在、これが最善のシステムであろうと思います。

しかし、このまま進めて行くと、弱肉強食の世界になります。大変な格差社会が出来ており無限の自由を求める人達が出て来ています。勝つか負けるかの世界になっています。そういう方向に社会全体が大きく動き出したのが、ベルリンの壁が崩壊した1989年でした。

アダム・スミスの理論にも、慎慮の徳に支えられた利己心が、正義の徳と仁愛の徳により制御されてこそ社会秩序が保たれるとの主張があります（高島善哉著『アダム・スミス』岩波新書1968年）。更に、日本の資本主義の父であり『論語と算盤』で有名な渋沢栄一先生も、自分はスミスと同じ考え方であると認めておられましたが、渋沢先生は、中でも仁愛の徳＝思いやり、を非常に強調されていました。

市場経済と会計・監査

売買取引の各段階における意思決定において会計が不可欠です。売上を最大にし、費用を最小にする結果、利益を最大にすることになる。これを合理的に行い、慎慮の徳を発揮することが、この会計により実現されるのです。

事業をする為には、金融・資本市場から資金調達する必要があります。実物経済を円滑に動かす為には、金融・資本市場が効率的に働かないといけません。金融・資本市場の意思決定は、基本的には企業の財務諸表から企業の財政状態、収益獲得能力を見ることになります。

資金を必要とする人が財務諸表を作ります。財務諸表が、銀行や投資家から信用されることが非常に重要になります。信用されるために会計基準があり、公認会計士がおり、監査が存在します。企業が会計処理をして作る財務諸表を作る為の指針を財務会計基準が提供します。企業は、それに従って作らねばなりません。そこにごまかしや間違いが無いかをチェックするのが会計監査人の役目です。どういう風に監査をするのかという尺度が、世界共通の監査基準に示されています。この基準に従って公認会計士が適正に監査しているかを業界が自主規制でチェックしてきました。しかし、公的な監視機関を求める社会の声が高まりました。

2. 監査業界の大変貌

(1) 企業会計不正事件と米国政府の対応

自主規制のシステムが信頼するに足りないという状況がありました。2001年12月のエンロン破綻をきっかけにして具体的制度作りを目指して世界中が動き出しました。米国の対応は早く、2002年3月に当時のブッシュ大統領が10項目プランを提案しました。企業統治の強化、監査の充実等、経営者の不正行為防止のための施策です。7月にはSOX法が制定され、SECの下に公開会社会計監視委員会(PCAOB)が設置されました。各国も相次いで実施しました。日本では、2004年4月1日に審査会が発足しました。

どうして公認会計士ばかり責められねばならないのか、という声は世界中にあります。公認会計士の崇高な使命を考えれば、この対応は当然のことです。公認会計士の監査を当局が検査して関与することは、公認会計士を苛める為ではなく、大変期待しているからこそです。いろいろストレスも多いでしょうから、審査会が悪者になって会計士の背中を押している訳です。そういう気持ちで業務を遂行してきました。

(2) 公認会計士・監査審査会と監査監督機関国際フォーラム(IFIA R)

公認会計士試験の願書提出者数は2010年の2万5千人をピークに減っていましたが、2017年に底打ちし、2019年には新試験制度前と同水準まで上がり、合格者数も回復してきています。新制度への批判もありましたが、金融庁財務局の真摯な対応により

定着し、社会人や女性が増えてきたことは喜ばしいことです。

2004年4月、金融庁に従前の公認会計士審査会を改組・拡充して現在の審査会が設置されました。審査会の主な業務は、公認会計士試験の実施、監査事務所に対する審査及び検査、公認会計士に対する懲戒処分

の審議です。2004年4月に、審査会初代会長の金子晃氏は記者会見で、「最近、公認会計士の監査の信頼性に対する疑念が出てきているが、社会のニーズと公認会計士制度との間のギャップによるものであり、審査会はどうした乖離を埋める重要な役割を果たす機関だと認識しております」と語られました。

この考え方を継承して、私共は9年間、務めて参りまして、かなり良いところまで来ました。公認会計士が目指すべきは、社会のニーズにいかに応えるかであって、それを実現する為の難題を解決するのが会計士の責務ですと、会計士さん達に言って参りました。我が国では日本公認会計士協会の品質管理レビューを法的・社会的な枠組みの中に位置づけています。審査会は、この品質管理レビューを基に大まかに判断し、必要があれば監査事務所に立入検査を実施し、協会とも連携しながら、問題を解決していきます。必要であれば審査会が直接検査出来るといった審査会権限拡大も行われました。協会のレビューに問題があると思えば、協会にも立入検査を行います。

2004年日本に審査会が出来、世界各国で監査監督機関が設置された後、相互の情報交換の必要性が認識され、2006年9月に監査監督機関国際フォーラム(IFIA R)が設立されました。困難であった財源問題を解決し、IFIA R常設事務局が東京に設置されることが、2016年4月のロンドンでの会議で決定されました。私は会長として行きましたが、金融庁の佐々木清隆さんに大変活躍していただきました。事務局はいま大手町にありますが、IFIA Rの中の活動に留まっている感じです。期待するほど展開していない状況ですが、国を挙げての重要プロジェクトであったことを再認識していただきたいと思います。

(3) 監査を巡る我が国における制度整備

2013年の監査基準の改訂において「会計監査人は監査役等と連携を図らなければならない」と規定されるなど、公認会計士制度はどんどん改正されました。もう大丈夫かなと思われていましたが、2015年に東芝の不正会計が発覚しました。原子力事業の巨額損失を巡り東芝と監査法人が対立した問題を契機として、金融庁は企業だけでなく監査法人に十分な説明をさせることにしました。監査法人が監査した企業の決算書類が「無限定適正」でない場合、判断に至った根拠を説明することは「正当な理由に該当する」と示し、守秘義務違反に当たらないと明示しました。

私共も、昔から守秘義務という言葉に嫌というほど聞かされてきました。守秘義務という言葉が出ると、そこで終わりだという感じでしたが、それを乱用して

きた過去があります。社会のニーズの変化を背景に、そういう過去の反省を踏まえてこういう制度が出来てきたことに留意して下さい。

3. 監査役への期待

今や、監査役の皆さんには公認会計士との連携が期待され義務となっています。監査人には、リスクアプローチに基づく監査計画の策定段階から監査役と適切な連携を図ることが求められています。公認会計士が、どういう制度的な環境の中で仕事をし、その環境がどう変わってきたのかをしっかりとご認識いただきたいと思います。毎年のように新しい制度が出来、期待が形にされています。その中で皆さんとの連携なのです。長々と制度の変遷について話してきたのは、それを知っていただきたいからです。

先程、守秘義務の話をしました。渋谷栄一氏の『論語と算盤』の中に、「もともと商業は、政治と比較すれば、機密など持たなくても経営していけるはずのものである」とあります。明治以降、資本主義が導入され、だんだん慣れてくるにつれ、ふらちな人が出てきます。「うまくいってるんだから秘密にしておいた方がいいだろう」、「訳の分からない人が騒ぐだけだから言わない方が社会の為にいいだろう」なんてことを言う人が必ず出てきます。そういう言い訳はいくらでも出来ます。

一方、どの組織にも絶対に譲らない人がいて、そういう人は憎まれ役になるのですが、社会の為にいつの時代も必要です。公認会計士も社会の酸いも甘いも経験して、「まあまあ…」などと言う人がたくさんいますが、そういうことを言っていられなくなっています。皆さんには、渋谷先生の数々の言葉を胸にして、自信を持って堂々と正しいことをやっていただきたい、会計士さんと一緒に頑張りたいと思います。

稲盛和夫氏も、著書『実学』に「私は、企業経営は公明正大に行うことが最も重要であると考えているが、それが保証されるために経営を衆人環視の下に置くことにした」と書かれています。エンロンなどもそうですが、トップが、「違法なことをしても社員は黙って仕事をしているじゃないか、これでいいのだ」などと思うようでは、会社はいずれ崩壊します。

私の知っている、ある不正会計を行った大会社の管理者は「内部情報の原価の数字は社員に教えない。教えると会社を辞めた時に、その情報を外に持って行ってしまうから」と、もっともらしいことを言っていました。そういう組織だから不正が起きやすかったのです。悪い情報は表に出さないと、一刀両断に決めるのではなく、何とか表に出して、それによって起きる問題を解決していこうという方向で知恵を働かせていただきたいと思います。

いくら立派な制度を作っても、それを運用する人が、どう対応するかにより、その意義・主旨は損なわれてしまいます。立派な制度を作り、それをしっかり運用

していただきたいというのが、審査会における9年間の経験を踏まえての、皆さんへのお願いです。

2018年4月の監査役協会の全国会議において「不正が発生したのは現場が悪いのであって、現場を徹底的に処罰すれば事が済む」といった発想について議論がありました。オムロン常勤監査役は「私はこのような発想は全く逆だと思います。問題の根源は経営側にあり、一連の不祥事を見ると、やはり経営と現場の『乖離』が顕著になっていたと思います」と述べられました。

八田青山学院大学名誉教授は、経営と現場の「乖離」を前提として、強い経営、強靱な経営を行う為のキーワードは「内部統制」だと言っています。昔は、経営者は「知らなかった」と言えば、それで済んだかも知れませんが、今や社会がそれを認めません。21世紀に入ってから世界は、社会が何を期待しているかが肝要です。「期待ギャップ」という言葉は、監査の世界では1970～80年代からよく知られており、専門家は「そんなことは今さら他人に言われる必要はない」などと仰います。しかし、ギャップを埋めることは、今の社会の要請です。悠長に構えている時代ではなく、どんどんやっていかねばならないのです。絶対に後戻りしてはいけません。グループ監査において、海外のどこかで小さな子会社が問題を起こしたけれど、これは重要性に入っていないだとして監査しないといったことがあったりします。そういうことで大問題になった例もたくさんあり、四大監査法人を含め、厳しく叱り対処して貰いました。

経営者の中には、「監査役は閑散役だ。あんなものに給料をやってもったいない」というようなことを言うひどい社長もたくさんいるでしょう。そういう例をいろいろご存知かと思いますが、皆さんで、そういう問題を共有していただきたい。むやみに聞えればいい訳ではありませんが、しっかり言うべきところを言い、議論して納得いけば矛を収めればいいが、そうでなければ矛を収めない、そういうことが大事だと思います。

2017年8月、日本監査役協会の当時の広瀬会長も「監査役等は、健全な懐疑心を持ち、時に経営陣と対峙するだけの覚悟を持たなければなりません」と語り、「監査役等は社長の部下ではない」と強調しておられます。

日本経済は、グローバル経済の中に組み込まれており、会計数字に基づいて経営判断をするというのは、欧米では当然の認識です。

会計だけではないのは当たり前です。しかし、会計は絶対に必要です。私は、学生に何十年來言っていることですが、会計数字を馬鹿にする人は、最後の最後、追い詰められたときに、数字をよくすることに四苦八苦します。最後の段階になって、会計について何も分からないまま「数字はどうなってる!？」と聞き、「こうすればこうなります」と言われて、「じゃ、それでやってくれ」と不正に走る経営者が実に多い。学生も勉強しない人はそうになっていく危険性は十分あります。だから、「会計をしっかり勉強して会計に振り回されないで会計をしっかり使いこなせるようになってくれ」

と常に言っています。会計数字が悪ければ、その原因のところで何が出来るのか、どういう風に黒字を確保し、持続的な経営をしていくのかに頭を絞っていただきたいと言いつけてきました。稲盛さんが書いておられるように、日本においては、「会計の数字は自分の都合のいいように操作できる、と考えている経営者さえいる」のですから、監査役もこの辺りはしっかり胸に刻んでいただきたいと思います。

監査役は会計の専門家ではない場合も多いでしょう。会計の話になると自信が無く、あまり口出ししないという状況もあるようです。私は、長年、博士論文の指導をしてきました。博士論文になってくると、院生は先生も知らないことを研究しなければならず、先生は自分も知らないことを指導しなければなりません。それでも、先生はそれを適正なものにする為にはどこが欠けているのか、そういうことは指導できるのです。監査役が会計の細かな原則や手続きを知らなくとも、何だかおかしいというのは分かるものです。変

だと思えば詳しく聞けばいいし、専門家がごまかそうとしたら、「俺の分かるように言え！」と言えいいのです。ディスクロージャーというのは、素人にも分かるように行うことになっているのですからそれが当然です。このところをしっかりとお願いします。

監査役への期待として、私の前任会長の千代田邦夫先生の著書『監査役は何ができるか』に「現場は過酷です。監査役！現場を直視し、現場を守り、現場力を強化することの重要性を再確認して下さい」とあります。これには本当に同感です。トップが悪さをしていると、苦しむのは現場です。そして、現場を守るのが、監査役です。今日、お話しさせていただいて、改めてそう認識しています。その為にも、監査役と外部会計監査人との連携をしっかりと強化していただきたいと思う次第です。

ご清聴いただき、ありがとうございました。

(文責 古川 孝宏)

第558回研修見学会

2020年1月7日

深川七福神めぐり

長年にわたり七福神めぐりを担当された眞田さんから担当者が代わり、令和になって初めての七福神めぐりを、距離が比較的短いこと(4km強)並びにコースが平坦であることを考慮して、15年振りに下町情緒があふれ、今なお江戸時代の雰囲気が残る深川の地で行いました。

1月7日、都営地下鉄大江戸線森下駅に、集合時刻の午前9時20分までに54名が集まりました。待ち合わせ場所が同じ他のグループの人が、間違えて我々の受付に申し出るハプニングもありました。はじめに担当者から若干のコース説明(コースマップは眞田さん時代と変わって既存のパンフレットを利用しました)と注意事項等の伝達があり、予定通り9時30分に大集団は列をなしてスタートしました。当日の天候は曇、青空が垣間見える時間もあり、歩き終えるまで雨に降られることはありませんでしたが、気温は平年より低く8℃前後の寒さでした。

さて、深川は明暦の大火(明暦3年・1657年)以降、徳川幕府の命により多くの寺社が移転建立されました。コースの途中で立ち寄った寺社以外にも周辺いたるところで多くの寺社を見かけました。また、深川は松尾芭蕉(宝永21年～元禄7年・1644～1691年)が日本橋から移り住み、奥の細道紀行へ出立した地でもあります。芭蕉に関係がある施設、場所にもできるだけ立ち寄りました。

コース立寄り個所の一番目は「深川神明宮」。七福神の『寿老人』(延命長寿の神)が祀られています。ここは深川の始まりの地ともいわれています。ここで

七福神めぐりでは多分初めてという集合写真を撮影しました。

続いて「芭蕉記念館」に向かい、その前庭を通り抜け、隅田川沿いを歩き小名木川の合流地点にある「芭蕉庵史跡展望庭園」、「芭蕉稲荷」(芭蕉庵があった場所と言われています)と芭蕉の名がつく場所に立ち寄りました。そして小名木川に架る「万年橋」へ。ここは江戸時代、富士山がきれいに見える名所として知られ、北斎の『富嶽三十六景』や広重の『名所江戸百景』に描かれた有名な橋です。創架時の詳細は不明ですが、江東区で最も古い橋の一つで、現在の鋼橋は昭和5年(1930年)に架けられました。

続いて地元の人が「横綱通り」と呼ぶ清澄の一画へ。ここには4つの相撲部屋(「高田川部屋」「尾車部屋」「鍛山部屋」「大鵬道場大嶽部屋」)があり、どの部屋もコンクリートの高い建物と部屋名の看板の相撲文字が印象的でした。二つ目の七福神はその区画のなかにある「深川稲荷神社」に祀られる『布袋尊』(清廉度量の神)。深川稲荷神社は、この付近に船大工が住み旧町名を西大工町と称したので西大稲荷ともいわれています。境内は狭く、参拝者は周辺の道路の路肩で列をなして待機する有様でした。

この区画から清洲橋通りに出て、これまた芭蕉にゆかりのある「臨川寺」へ。仏頂禅師が寛文の頃(1661～1672年)に創立したこの寺へ芭蕉は足繁く通って禅師と交流し、その影響を受けて俳風を変えていったと言われています。ここから清澄庭園の脇道を通り、清澄通りを横断して「深川江戸資料館」へ。この地下1階から地上2階までの吹き抜け空間には江戸時代



後期、天保年間（1842～1843年を想定）の深川佐賀町の町並みや庶民生活が再現してあり見ごたえがある施設ですが、今回はそこへは入らず、トイレ休憩と数少ない愛煙家のための喫煙場所として利用させていただきました。

続いて、三つ目の七福神『毘沙門天』（勇気授福の神）が祀られている「龍光院」、四つ目の七福神『大黒天』（有福蓄財の神）が祀られている「園寿院」へと歩きました。その途中、樺太（サハリン）が島であることを明らかにし、間宮（タートル）海峡にその名を残している江戸時代の探検家、「間宮林蔵の墓」にも立ち寄りました。

そのあとは清澄通りに戻り、『南総里見八犬伝』を著わした江戸時代の戯作文学の先覚者「滝沢馬琴生誕の地」や芭蕉の高弟でありパトロンでもあった杉山杉風（さんぼう）の別荘があったという仙台堀川に架かる渡辺橋のたもとの「採茶（さいと）庵跡」（濡れ縁に腰掛け

た旅姿の芭蕉像が迎えてくれました）を経て、五つ目の七福神『福祿寿』（人望福德の神）が祀られている「心行寺」へと進みました。ここは岩国藩主で、有名な錦帯橋を架橋した吉川広喜の妻、養源院が開基した寺ですが、境内にある江東区最古の五重塔にカメラを向ける人も多くいました。

今回の参加者は例年と比べて健脚な方が多く、ここまで想定していた時間より30分ほど早く進行していたため、時間調整のため急遽当初の予定にはなかった「深川ゑんま堂（法乗院）」に立ち寄ることにしました。皆さん、巨大なゑんま様の前で、お賽銭を入れて有難い説法を聞かれたようで、おおむね好評でした。

時間調整も無事終わり、六つ目の七福神『弁財天』

（芸道富有の神）を祀る「冬木弁天堂」へと歩きました。材木商・冬木直次が江戸初期、近江竹生島弁財天の分霊を日本橋茅場町の邸内に祀り、後に孫の弥平治がこの地に移したと伝わっています。狭い境内は多くの参拝者でごった返していました。

ここから門前仲町の中心地へ移動しました。まずは「深川不動堂」へ。元禄16年（1703年）に始まった成田山新勝寺の出張開帳が深川不動の起こりと言われ、明治14年（1881年）に不動堂が完成しています。この辺りは門前町として今も江戸の情緒を色濃く残しており、松の内の当日も「人情ご利益通り」と呼ばれる参道は多くの参拝客で賑わっていました。

いよいよ最後の立寄りどころは、七つ目の七福神『恵比寿神』（愛敬富財の神）が祀られている「富岡八幡宮」。社伝によると、寛永元年（1624年）僧長盛が京都から八幡の神像を持って江戸に出て来て、永代島を中心に埋め立てられた土地の祠にその八幡神像を奉安して、後の寛永4年（1627年）に立派な社殿を建立したと伝えられています。境内には「深川力持碑」「木場の角乗り碑」をはじめ「横綱力士碑」「大関力士碑」など、深川にまつわる多くの石碑等がありました。江戸三大祭りの一つ「深川八幡まつり」で練り歩く、巨大な神輿も展示されていました。



今回の七福神めぐりは一人の落伍者も出ずことなく、12時15分、解散宣言で終了しました。

皆さん、七福神に今年の福德を祈ることは充分できましたか？

その後、12時30分から近くの「はなの舞門前仲町店」で開催した懇親会には47名の参加がありました。飲食終了次第流れ解散としましたが、制限時間の3時間いっぱい、新年早々から、ここかしこのテーブルで話が盛り上がっていました。

担当が代わって初めての今回の七福神めぐりは研修見学委員全員の尽力（ワンチーム）で無事終えることができました。感謝申し上げます。

（飯盛 孝夫、杉山 通人）

元号が令和になって初めての新年交礼会が1月21日（火）学士会館において、午前中に行われた熊野英生講師の講演会に続き、13時より開催されました。

当日は冬晴れの日差しに包まれ、ご来賓13名、会員・会友126名という大勢の参加者にお集まりいただき、菅野重雄会長による開会挨拶の後、ご来賓を代表して、当会特別顧問の獨協大学法学部教授・高橋均様、日本監査役協会専務理事・大野和人様よりご挨拶をいただき、続いて、当会特別顧問の弁護士・山口利昭様によるご挨拶と乾杯のご発声で歓談へと進みました。

日本公認会計士協会会長・手塚正彦様からの祝辞が読み上げられ、また、新会員・会友の皆さんを代表し

てリーフラス(株)監査役の森川英治さんから挨拶が述べられ、宴酣わとなったところで、生涯学習部会・同好会・ゴルフ会の各代表が登壇し、羽持彰副会長（生涯学習部会長）が挨拶、各会代表からは是非気軽にご参加を、と部員勧誘のメッセージがありました。

会の後半には、恒例の楽器演奏同好会の楽しいバンド演奏と楽友会（男声コーラス）の美声が披露され、ブラボーの声に応え「ローハイド」のアンコール、「今日のひととき」を参加者全員で合唱し、金馬房雄副会長の中締めで15時にお開きとなりました。

（岩本 泰志）

楽友会

文京区「合唱のつどい」に出演



1月26日（日）、文京区「合唱のつどい」（50グループ参加）が文京シビック大ホールで開催され、楽友会が参加しました。

「My Blue Heaven」、「おてもやん」、「ローハイド」の3曲を、平眞彌さんの指揮、安齋麗奈さんの伴奏で歌いました。いつも演奏するときの服装は、黒のスーツに蝶ネクタイなのですが、「ローハイド」を歌うのに「蝶ネクタイはおかしいのでは」との意見があり、カウボーイハットとネッカチーフを着けてカウボーイスタイルになり、鞭の音も入れて元気いっぱい歌いました。平均年齢76歳ですが、歌うことは楽しく、健康によいので、一度例会の見学にいらっしやいませんか。お待ちしております。

（楽友会委員長 川村 知重）

棋友会

1月24日・25日

新春鴨川合宿大会結果

参加者：8名

優勝	藤間孝雄	元(株)カナデン
準優勝	向井俊夫	日鉄ケミカル&マテリアル(株)
3位	下村勝利	元(株)鴨川グランドホテル

生涯学習部会コーナー



句遊会

一月詠草

兼題…初空、ラグビー、当季雑詠

初空にぽつかり白き雲ひとつ

城戸崎雅崇

初空の光へ未知へ今朝一步

中山 知祐

玉砂利の踏む音届け初御空

石原 克己

初空に香港島の夜明けかな

大仲 正敏

初空へサッカーボール高々と

川田 勝美

ラグビーや逆転トライ涙雨

生江沢五風

ラグーラの津波怒涛攻め凌ぎ

佐藤 政百

飛び跳ねるボールに突進ラグーマン

森 邦彦

ハイパント恐怖に飛び込むラグーマン

安井 正浩

ラグビーやワールドカップの夢のあと

小野 信

冬ビル街一軒家あり灯りあり

眞田 宗興

画友会



大山の千枚田 (房総) 寺澤 秀浩



(2020年1月例会にて)

千葉県鴨川市に日本の原風景を代表するとも言える大山の千枚田がある。ここは公募によるオーナー制で耕作され、農協指導で管理されている。初夏には田の畔に石油ランプが灯され、昼夜ともバスツアー等見学者が多数訪れる。この作品は、当会の研修見学会の一端で見学した折のスケッチとデジカメスナップ写真を油彩に描き「日本の自然を描く展」(上野の森美術館主催)に出品したもの。

事務局通信



◆行事報告

第171回理事会

1月16日(木)10:00~12:00 文京区民センター 15

会報委員会

編集 1月9日(木)10:00~12:00 事務局 7

校正 1月22日(水)10:00~12:00 事務局 6

広報委員会

1月9日(木)14:00~17:00 事務局 8

◇一般部会

第558回研修見学会

1月7日(火)9:20~15:30 深川七福神めぐり 54

第766回講演会

1月21日(火)11:00~12:30 学士会館 149

(他特B定期:1名)

講師 (株)第一生命経済研究所首席エコノミスト
熊野英生氏

演題 2020年の経済動向〜東京五輪を迎えて

新年交礼会

1月21日(火)13:00~15:00 学士会館 126

(他特B定期:1名)

◇監査部会

第327回監査セミナー

1月17日(金)14:30~17:00 スカイホール 89

(他体験:5名、特A定期:1名、特B定期:2名)

講師 一橋大学名誉教授 廣本敏郎氏

演題 監査役への期待
〜頻発する企業不祥事を踏まえて〜

19年度第7回監査基礎講座

1月20日(月)14:00~17:00 区民会議室 33

(他特B定期:1名)

講師 元王子タック(株)監査役 荒木道雄氏
サイバートラスト(株)監査役 小林正一氏

テーマ 職務確認書(監査役および取締役)の活用ガイ
ダンス

19年度第5回会計基礎講座

1月10日(金)14:00~17:00 文京区民センター 25

(他特B定期:2名)

講師 菱電商事(株)顧問 大屋俊治氏

テーマ 決算と法規制
〜会社法における会計規定を中心にして〜

第234回監査実務研究会

1月28日(火)14:00~17:00 文京シビックセンター 29

(他特B定期:1名)

問題提起者 (株)キューブシステム常勤監査役 中井淳夫氏

コーディネータ 元日本ブラスター(株)監査役 寺嶋 徹氏

テーマ リクシル問題

第83回スタディグループ分科会

1月16日(木)14:30~17:00 文京区民センター

30

発表者

リーダー／コーディネータ

ユーピーアール(株)

常勤監査役 斎藤安弘氏

メンバー 兼松コミュニケーションズ(株)

常勤監査役 並木雅史氏

横河計測(株)

常勤監査役 丸山孝生氏

王子木材緑化(株)

常勤監査役 深谷和章氏

テーマ 監査役と経営トップのかかわり方

第86回監査技術ゼミ

1月29日(水)14:00~17:00 文京シビックセンター 46

講師 プロアクト法律事務所弁護士 竹内 朗氏

テーマ 3線ディフェンスを活用したグループ内部統
制の整備と監査役等の役割

監査役職務確認書委員会

1月8日(水)13:30~17:00 事務局 6

取締役職務執行確認書委員会

1月24日(金)15:00~17:00 事務局 5

企業集団内部統制監査委員会

1月10日(水)10:00~12:00 (株)べんてるの会議室 6

1月23日(木)14:00~17:00 事務局 6

◇生涯学習部会

写友会 例会

1月10日(金)13:30~17:00 文京区民センター 21

画友会 例会

1月13日(月)13:00~17:00 文京シビック・アトリエ 11

句遊会 例会

1月8日(水)14:00~16:00 菱友会会議室 7

楽友会 例会

1月16日(木)14:00~17:00 浅草教会 21

1月23日(木)14:00~17:00 〃 21

棋友会 合宿

1月24日(金)~25日(土) 鴨川グランドホテル 8

◇同好会

声友会

1月21日(火)13:00~16:00 (銀座)505 9

エッセイクラブ

1月29日(水)11:30~14:30 如水会館 9

楽器演奏同好会

1月18日(土)10:00~12:00 横浜練習会場 10

江戸文化研究会

1月18日(土)12:00~16:00 国立劇場 40

◆会員・会友異動

(新入会友)

○飯野重夫 元(株)インボイス

(交替会員)

○川地真人 エヌエス環境(株) 常勤監査役

前任:栗田好文氏

(会員から会友へ)

○栗田好文

会 員	会 友	計
201	146	347

2020.1月末現在

編集後記

今年は、いよいよ東京オリンピックの年になりました。新春の講演会はおなじみの熊野英生氏による2020年の経済動向です。昨年秋からの消費税2% upによる影響は、軽減税率や増税対策諸手当で小売り売り上げの反動減は前回の増税のときより小さい。オリンピックにかけて売り上げは増えるが、7~9月がピークであろう。また、インバウンドも政府は4千万人を狙っているが、韓国との問題もあり3600万人程度ではないか、との予想でありました。講演以降、武漢のコロナウィルス問題が大きくなり、世界的なひろがりを持つようになりました。結果として今後の経済に影響することになりそうで、予想とは少し違ってくることになると思います。監査セミナーは一橋大学名誉教授廣本敏郎氏による「監査役への期待」であり、公認会計士及び監査役の在り方・連携について講演していただきました。研修見学会は「深川七福神めぐり」で下町情緒あふれる深川近辺の七福神めぐりをして、世界平和と家族の安泰を祈りました。

(川村 知重)